

「代弁者」としてのオタク語り

——1980 — 1990 年代の批評的言説を中心として——

永田 大輔

本稿は、オタクをめぐる言論の中でも「当事者として代弁する」という特異な話法をとる言論に着目する。通常であれば、代弁者というのは必ずしも当事者性と関連する概念であるとはいえない。しかし、むしろその短絡が起こることによって何が起っているのかを本稿では明らかにする。

ここでいう代弁者としての言論の定義として本稿が着目するのは、(1) 誰かの代わりに何かを言うという形式をとり、(2) その権利を持つのは当事者に近いものという性質を持ち、(3) その際に代弁されている集団の側こそが重要になるというものである。

こうした言論の条件を充たし、かつ類似した言説であるように見える大塚英志と竹熊健太郎の二人の言論を追尾し、その異同を追う。そして両者のようなオタク語りの特異な形式がとられることで、それぞれ何が達成されているのかを本稿では明らかにする。

1 問題設定

1-1 当事者としての代弁者

本稿は、「オタク¹」をめぐる批評的言論の中でも、「当事者として代弁する」という一見奇妙な話法をとる言論に着目する。そうした言論の中で、その話者が、どのように自己の立ち位置を担保しながら、「代弁者」としてオタクに関して語るのか、そして、そのような語りが行われることで何が達成されようとしているのかを検討する。

本稿で着目する「当事者として代弁」しながらオタクを語るというときの、その代表的な語りの一つを本田透の以下の言論の中からみることがができる。

俺が静かに他人を傷つけずに生きていくには、引きこもってじっと妄想しているしかな

かったのだ。ところが女はそれすら許さないという。俺だけじゃない。俺と同じ魂を持つ、心やさしく生きたがっている、愛を求めて妄想の世界に生きている男たち全員が軽蔑と嘲笑と搾取の対象にされているのだ。

だから俺は勝手に、心が優しすぎてこんな目にあってもなお何も言わずに黙って耐えているオタクのみんなに成り代わって、この三次元の世界、恋愛資本主義が支配する世界に「NO」を突き付けずにはおられなくなったのだ。(本田 2005: 401)

この語りからはいくつか注目すべき論点を取り出せる。一つは、「オタクのみんなになり代わって」という形で、代弁をすることが志向されていることである。もう一つはその代弁の正統性として、「俺と同じ魂を持つ」「愛を求めて妄想の世界に生きている男たち全員」という

形で、オタクという対象に対して「当事者性」がその資源として持ち出されていることである。このようにオタクをめぐる批評的言論の一つの形として、「当事者として代弁する」という語り方がされている。これはある種奇妙な語りであるといえる。

近年、社会学において大きな主題の一つに「当事者」という問題系は浮上してきている。その中でも「当事者」というキーワードが注目されてきたきっかけとなった中西正司と上野千鶴子の「当事者主権」を巡る議論の中では、「当事者主権の考え方は、第三者や専門家に自分の利益やニーズを代弁してもらうことを拒絶する」（中西・上野 2003: 18）として、ニーズを持つ「当事者」と専門家としての「代弁者」が明確に対置されている。

とはいえ、当事者の一人として、あるいは当事者に近いものとして代弁をするという営み自体はそう特異なものではない。子どもの権利をめぐる主題の中で、年少者の「自己決定」が問題化される際に、そこでも最終的には誰かが「代弁者」として語らざるを得ないという論点は浮上してくる。また、重篤な患者やスティグマを持ったもの等の「自らを語り得ぬ人々」はいかにして「当事者」として語り得るのかという観点からの問い直し（川 2012）等、当事者性だけでは解決されない問題も多く、そこでも「当事者に近い者が」「当事者を代弁する」という形での議論が存在する。また、社会問題として問題化する以上、当事者として問題を提起してもそのことが自己だけの問題に限られなくなるという点で、「当事者性」を経由した「代弁」というものがありえるだろう。このように「当事者」と「代弁」が結びつくこと自体はそう有りえないことではない²。

だが、あくまで「当事者」と「代弁」という

両者の結びつきは本来限定的なものであるのに対し、上述した本田の語りは、そうした葛藤を経由することなく、オタクを「黙って耐えている」と「自らを語り得ぬ人々」（川 2012）であるかのように位置づけつつ、だからこそ「同じ魂を持つ」当事者である自分が代弁する必要があるというように奇妙な形で、両者が滑らかに接続している。このような短絡がいかにして可能になっているのかを本稿では取り扱う。その糸口として冒頭の本田の引用から取り出すべきもう一つの論点として、自分たちが「恋愛資本主義」から「搾取」されており、立ち上がらねばならないという外在的な言明に対する対抗が存在することである。この点に関して次項で議論を展開する。

1-2 オタク語りの「閉塞」

これまで引用してきた『電波男』は、2004年のベストセラー小説である『電車男』に対する自分が「電波³」であるという自虐を含んだパロディである。『電車男』は、インターネット上の巨大な掲示板サイトの2ちゃんねるが発祥という触れ込みで流行した作品である。同書は、2ちゃんねるの書き込みをそのまま摸した形の書籍であり、多数のメディアミックスもなされた作品だ。この作品を契機に秋葉原等でのオタク文化が一般に広く受容され始めたという議論も多い。ストーリーは、あるオタク男性（電車男）が、電車ですらあう非オタクの女性との恋愛を、2ちゃんねるの参加者（住人）からの助言を受けながら成就させていくというものである。しかし、本田はこの電車男を強く批判する。

電車男が真実か捏造か、という問題は、本質的にはどうでもいいのだ。問題は「純愛」

のネタを見つけるや否や、それを商品にしてしまう恋愛資本主義そのものの構造なのだ。そして、いよいよオタクが、恋愛資本主義の搾取対象として狙われるようになったのだ。(本田 2005: 210)

ここでは、「真実か捏造か」は本質的な問題⁴ではなく、「恋愛資本主義」という構造の問題だと述べられている。そして、オタクが恋愛資本主義の「搾取対象として狙われる」ということこそが問題だと定式化しており、「二次元⁵」の純愛へコミットメントすることで、「三次元⁶」の金銭を媒介とした恋愛資本主義社会からの離脱をするべきだと「代弁者」として訴えているのである。このようにマスメディア的な言論を先回りし、その説に対して抗弁するというのが、代弁者としての語り駆動する上での大きな条件となっている。

実際に、こうした言論の形式を正確に指摘していたのが、2001年の東浩紀の『動物化するポストモダン』の中でなされた、オタクをめぐる言論の状況整理である。

宮崎事件により生じたこのような分裂は、九〇年代が終わるまで、オタク系文化について客観的に正面切って語ることを難しくしていた。一方で権威あるマスメディアや言論界ではいまだにオタク的な行動様式に対する嫌悪感が強く、オタク系文化についての議論は内容以前にそのレベルで抵抗にあうことが多い。実際、筆者自身、かつてアニメについての小著の企画が持ち上がった時に、ある有名な批評家から強く反発を受けたことがある。

他方でどちらかといえば反権威の空気が強いオタクたちには、オタク的な手法以外のものに対する不信感があり、アニメやゲームに

ついてオタク以外のものが論じることそのものを歓迎しない。現代思想の学術誌で論壇に現れ、出自的にはサブカルチャーの世界から遠い筆者は、この点でも一部から反発を受けてきた。つまり、簡単に言えば、一方にはオタクなどにそもそも価値を認めていない人々が、他方にはオタクについては特定の集団だけが語る権利を持っていると考える人々がいて、その両者のどちらにも加担しない立場をとるのは極めて難しかったのだ。(東 2001: 11)

本論でも大きく取り扱う、1989年に起こった宮崎事件⁷を起点として、一方の極にオタクに「嫌悪感」を持ち、それを優れたものとして語ることに反発するという「負のラベル」が、成立したと指摘する。そしてその裏面として他方の極に、特定の集団だけがオタクを語る権利があるという議論が成立したと指摘している。このような東の状況診断は、上述の本田のような「抗弁」としての議論が成立する状況を見事に言い当てていたといえる。

東は、こうした「閉塞」を乗り越えることが、「客観的に」「当たり前」のことを当たり前批評できる風通しのよい状況をつくり出す(東 2001: 12-13) ために必要であると述べている。しかし、別様の評価をすることも可能なのではないだろうか。本稿ではむしろ、東が「閉塞」と述べるような状況の中から、どのような言論が展開されたのかを見ることに関心がある。つまり、外在的な説明を与件としながら、それに対し「当事者性」と「代弁者性」を短絡させたような言論が、どのような文脈の下でなされていたのかを問いたいのである。本稿では、1989年以降にあらわれたこの特殊な言論の形式を取扱い、その個々の場面でどのような達成

がなされようとしているのかに着目する。

2 先行研究と分析視角

2-1 オタクをめぐる研究状況

本項では、オタクをめぐる議論が社会的にどのようななされてきたのかに関して整理し、本稿の立ち位置を明示する。オタクをめぐる議論の中では、そのオタクをめぐるカテゴリ一定義に参与するような批評的言論が社会学内でも先行して流行してきた。その反省とともに批評的な言論との距離の取り方が重要な論点となる。

オタクをめぐる定義活動として、社会学者自身が批評的な議論を展開することもみられる。宮台真司の議論では、オタクを「コギャル」「新人類」と対置する形で議論し、その歴史的性質が強調された（宮台 1993, 1994）。オタクに関して言論を展開した社会学者で、宮台と並んで重要な論者として大澤真幸がいる。大澤は、彼の理想の時代、虚構の時代、不可能性の時代という時代区分をめぐる議論の中で、虚構の時代という時代類型の最も徴候的な人物像としてオタクというカテゴリーを挙げている（大澤 1996）。そして、その議論は現代に生きるもの全てに当てはまりうると議論していた。

こうした議論に対して、批評的言論から、意図的に距離を取ろうとする議論が見られる。そうした議論は大きく（1）実証主義的なスタンスと（2）構築主義的・知識社会的なスタンスに分けることができる。

実証主義的な議論の例として、例えば七邊信重は、東が批評的に提起した議論（東 2001）に対して、実証的なフィールド（彼の場合は同人即売会）において、出てきた知見を元に反駁をしていく（七邊 2005）。しかし、そのフィ

ールドの人々が本当にオタクか否かというオタクの定義をめぐる問題は、一旦はこうした手法では棚上げせざるを得ない。

オタクという概念に関して、構築主義的・知識社会学的な視点から問うようなタイプの議論も存在する。広く言えば本研究もその立場に属すると言ってよい。その中でも松谷創一郎の議論は、宮崎事件のネガティブなイメージと現代の一般化したオタクイメージとの落差に対する違和から議論を始め、その構築プロセスに着目している。松谷によれば、宮崎事件以降のオタク文化は初め病理化され、次第に中森・大塚が擁護するようになり、オタクの称揚というイメージも一方では生まれるようになる。そして、薄気味悪いイメージと専門家としてのイメージの双方が生まれてくるようになる。そして現代では、そのイメージが次第に細分化していくと同時に、宮崎事件の時代とは異なりオタクに関するバッシングに対して逆バッシングが帰される等の反応が示されるようになる（松谷 2008）。このような拡散・一般化のプロセスとしてそのイメージの違いを描き出すという点で本稿と関心を一にするうえ、扱う資料のほとんどが本稿で分析する資料と同一のものである。しかし、本稿ではオタクをめぐる内容の変遷ではなく、オタクを語る際に「どのような立場」で「どのような資格によって」語ろうとするのかという観点に焦点を当てることになる。

こうした本稿の関心は、オタクというカテゴリーが具体的にどのように運用されてきたかに着目する團康晃の議論と近い距離にある。とりわけ、宮崎事件以降の大塚英志の言論に大きなウェイトを置いているという点でも、團の議論は本稿の重要な先行研究となる（團 2013: 59-61）。しかし、團がいうような「ぼくら」としてオタクというカテゴリーを大塚が運用したとい

う議論には留保がある。本稿では、むしろ「代弁者」というキーワードに定位しながら、どのように「世代全般としての共感」と「オタクという集団との結びつけ」という一見矛盾する話法が共存して展開されていったのかということを見ていく。そこでは、オタクというカテゴリーが、「当事者であること」と「代弁者であること」をめぐる重層的な関係の中で記述されていることに着目することになる。

2-2 本研究の分析視角

本稿は、1980年代から90年代の批評的言論を分析の俎上に載せる。その際に、本稿では「当事者として代弁する」という実践に着目すると述べてきた。しかし、前述したように代弁者とは一般的な用法においては、必ずしも当事者性を含む概念とは言えない。それでも分析にあたってこの語彙を選択する意義を以下あらためて確認しておく。

確かに一見すると本稿で主題的に取り上げる言論は、「当事者性」といった方が適切なようにも見えるかもしれない。だが、本田が「みんなになり代わって」と述べる時、そこでは、公的な言論に開くという形で、少なくともただの「当事者」とは異なった資格を自らに付与しているようにも映る。ただ、この点だけを見れば、今度はその資格については「代表者」として形容する方が穏当だとする議論もあるかもしれない。

しかし、それでも「代表者」ではなくて「代弁者」という言葉の本稿で選択するには、理由が存在する。一般的に「代表者」という語は、その分野にかかわる決定に携わり何らかの主張を行う主体というイメージを想起させる。また、そこで「オタク」の何かを代表するときには、それは集団としての代表であり、「代

表者」の側が何を主張するのが重要になり、その「代表者」の側の語りこそが意味を持つ。

それに対して「代弁者」の場合には、その代弁される集団に焦点があたる。つまり、いかなる手続きを以て、誰の代弁をしようとするのが問題となる。本稿が「代弁者」という言葉を選択する理由は、この代弁される集団への焦点の当たり方に注目するためであるが、それに加えオタクをめぐる代弁者の場合は同時にいくつかの特殊な言論の形式を持つ。

本田の議論を出発点にここまで確認したように、本稿で注目する、「オタク」を「当事者として代弁する」という語りは、外在的な説明図式を与件としつつ、以下のような形式をとる。(1) 誰かの代わりに何かを言うという形式をとり、(2) その権利を持つのは当事者に近いものという性質を持ち、(3) その際に代弁されている集団の側こそが重要になるというものである。以下、本田以前にさかのぼって「当事者として代弁する」オタク語りを検討しているが、その際に先の三つが具体的にどのような文脈で成立するかに着目する。

まず、3節ではその前史を検討し、4節では大塚英志とその周辺に関して議論する。5節では、その大塚の議論と一見すると非常に近い性質の実存的なオタク語りをしている言論として、竹熊健太郎の議論に着目し、大塚との異同を明らかにする。この二人の論者による「代弁者としてのオタク語り」の異同を検討することで、オタクをめぐる語りのある種の範形性のバリエーションと、その語りによって達成されていることを明らかにする。

3 1989年以前の「神話」

オタクに関しての前史を検討する。オタクと

いう言葉は、『漫画ブリッコ』の1983年の「オタクの研究」という中森明夫の連載がその起源であるとされる。

『おたく』の由来については、まあ皆も察しがつくと思うけど、たとえば中学生くらいのガキがコミケとかアニメ大会とかで友達に「おたくらさぁ」なんて呼びかけるのってキモイと思わない？（『漫画ブリッコ』1983.7.1.p.172）

この引用部から考えるべき論点はいくつか存在する。第一におたくという呼称は「おたくらさぁ」と二人称で呼び合っている関係をその起源としていることである。さらに、そうした言及は、はじめから「キモイと思わない？」という問いかけで終わっているように、ある程度否定的なニュアンスを持ったものとして発見されている。そして、この連載に対しては大塚が「差別的である」として、以下のようなクレームを申し立てている。

人は多分、自分の依る処の価値でしか物事を見れないのだと思います。それは仕方のないことで、ただ、他にも様々な価値のあることを認め、時に、別の〈価値〉から自分の〈価値〉を計り直すことは可能です。〈おたく〉批判もその様な上に成り立つものであってほしいし、一方、まんがファンの人たちも自分のふるまいを第三者の目から見つめることは決して無駄ではないと思う。（『漫画ブリッコ』1984.6.1.pp.190-191）

ここでは、中森による表現が差別的だと指摘がなされているが、それと同時に「おたく」という他称とは別に、自称カテゴリーとしては

「自分たち漫画のファン」を区別して用いている。そして、このカテゴリーに当てはまるのが、どのような人々であるかという議論は公的に深められることはないまま、「おたくの研究」の連載は中止されている。後述するように、大塚は後に「当事者として代弁する」かたちでオタクについて論じることになるが、ここでは、外在的な批判に抗弁するものの、それは倫理的な差別批判に留まっており、オタクに関していかにして当事者性を感じるべきであるかという問いは見られない。

それに対し浅羽通明は、この中森明夫のオタクをめぐる語り、実は自分たちや読者のことを含めた自虐的な要素を持った語りであり、当事者性を一段ずらしたものであり、「自分こそはマシなおタクである」という言い逃れであると指摘している（浅羽 1991）。ただ、その診断が正しいとしても、問題なのはオタクに関してはむしろ当事者性をそのまま表すことのために、代弁してまで権利を語る必要性が希薄であったからだといえる。

ともあれ、83年の時点でこうした論争は一部では存在したが、それも後年行われることになるオタクをめぐる公的な場での語りと同列に扱われるものではなかったことを、後に中森が再帰的に報告している。

「ボンピュー族」「金ゴロー族」「こたつむり族」「出産ギリギリ族」「アンマリッチ族」「仮面少女」「フライヤーズ」「新男類」……いちども耳にしたことのないこれらの“流行語”の数々を掲載している89年度版の『現

代用語の基礎知識』『イミダス』には、「おたく」はもちろん、「おたく族」「オタクキー」の姿もない。(中森 1989: 89)

一連の「耳にしたことのない」「流行語」を並べ立て、その言葉に及ばないほど「おたく」という言葉の一般への認知度が低かったことが指摘されている。しかし、こうした状況は1989年の宮崎事件を契機としてマスコミでの「おたく」への言及が蓄積されるようになって以降大きく変容する。それでは、外在的な「おたく」語り蓄積されていくなかで、本稿が問題化する「当事者として代弁する」言論はどのように展開されたのか。

4 大塚英志の言論と拡張していくカテゴリー

4-1 『オタクの本』と『Mの世代』—反マスコミとは異なる話法

一般に、オタクをめぐる言論状況は、1989年の宮崎事件以降変化したとされる。そうした状況の中で重要な影響力を持った本として、その1989年に刊行された2冊の本がある。『別冊宝島 おたくの本』と『Mの世代』である。本節では、マスコミによる外在的な語りに抗弁するという点では共通のスタンスをとりながらも、異なる話法をとることになるこの2冊を比較し、「当事者として代弁する」オタク語りの特性を検討する。『おたくの本』が反マスメディアという話法をとりながらもマスメディア的な論理と共振してしまっているように見えるのに対し、『Mの世代⁸⁾』では、対談者の大塚英志が「代弁者」というオタク語りの特異な話法を用い、独自の達成を行ったことに着目する。そこでは、「当事者性と代弁者性」がどの

ように短絡させられたのか、それが「世代」の問題として定式化されることで話者がどのように位置づけられることになったかが論点となる。

『おたくの本』は、様々な領域における何人かのオタク当事者(とされた人々)に対するインタビューを主要なコンテンツにしている。その巻頭言では、「おたく族」をめぐるマスコミの語りに対して以下のような論評が加えられている。

幼女殺人事件で突然大衆メディアに浮上した「おたく族」なる言葉。大新聞や週刊誌によると、「おたく族」とは「アニメやマンガのファンで、ファッションや恋愛に興味のない暗い青少年」ということになる。これを翻訳すると、「わけのわからないことをやっている、薄気味の悪い、社会的意味のない奴ら」ということになる。あなたもきっと、そう思っているはずだ。だが、それは間違っている。(別冊宝島編集部 1989: 2)

このように「大衆メディア」が「おたく族」という言葉に対して、ネガティブな評価を与えていたと指摘されている。ここで重要なのはそうした言論と距離を取ろうとしていることである。大衆メディアの描くオタク像に「それは間違っている」と明確に反論する構えをとっている。だがその反論は、実際のところ、「大衆メディア」の議論から自律したものとなっていたのだろうか。

この本では、ロリコンと呼ばれる「おたく」特有の嗜好が実は「男になりたくない」願望の現われだったことをつきとめた。架空の美少女という共同幻想の「場」を得ることで、

少年たちは生身の女性と無理につきあう必要がなくなった。そして、成熟を不要にするこの「場」の磁力こそ、「おたく」の正体なのだ！（中略）現代思想家たちはなぜか誰も「おたく」に気づいていないようだが、「おたく」こそはポスト生産社会を読む鍵に違いない。この本はそういう視点のもとに、「おたく」の記号生成と消費の現場に直接切り込んだ日本で初めての試みである。心臓の弱い方はご遠慮ください。さあ、いくぞ！（別冊宝島編集部 1989: 2-3）

確かに、「現代思想家たち」に呼びかけ、「ポスト生産社会を読む鍵」と位置づけるなどして、オタクというトピックをアカデミック寄りの論壇へひき入れることが目指されている。その点では、「大衆メディア」によるオタクをめぐる語りとは異なる意義をもつということが強調されてはいるが、分析に入ると、オタクは「男になりたくない」「現実だと思えば成熟する必要がない」といった形で語られている。このような語りも、「大衆メディア」による位置づけとどこまで距離があるかを判断することは難しい。

巻頭言以降の記事についても同様の評価ができる。全体は、「おたくの現場」「おたくという第三の生」「おたくという生き方」「おたくと高度消費社会」という四つのパートに別れるが、「アイドル」「ゲーマー」という現在でも違和感のないものばかりでなく、「デコチャリ」等、現在ではあまり言及されないものも含めて、様々な趣味がオタク的なものと位置づけられている。ここでも、インタビュー取材というその手法も含めて、既存のマスメディアが語るイメージとかなりの程度重なることになる。同書で試みられたオタク語りは、マスメディアとの差

異化を意識しつつも、それを十分には実現しえなかったのである。

これに対して、同じくマスメディアが語る言論との差異化を意識しながら、それを具体的に実現するために異なる戦略をとったのが、『Mの世代』において「代弁者」としてオタクを語った大塚の語りである。『Mの世代』は、その巻頭言の中で、先行する大塚のある発言を「出発点」（中森・大塚 1989: 9）として位置付けている。編集の巻頭言の中で、この発言で「胸をど突かれた気がし」（中森・大塚 1989: 8）、発刊を決意させたものだと言われてもいる。その大塚の発言は以下のようなものである。

TVに映し出された彼の部屋の本棚にはぼくがかつて編集した単行本の背表紙がちらりと見えた。ぼくが最初に編集者として足を踏み入れた雑誌のバックナンバーも並んでいた。彼がぼくの読者であった以上、ぼくは彼を守ってやる。二六歳のおたく青年の主張を代弁したところで何の意味もないかもしれないが、彼の生きてきた不毛とぼくが生きてきた不毛がつながっているとわかった以上、そうする他にないではないか。（中森・大塚 1989: 8⁹）

ここでは、「代弁したところで何の意味もないかもしれない」「ぼくが生きてきた不毛とつながっているとわかった以上、そうする他にないではないか」というように、まさに本稿が問題としている当事者性と接続した奇妙な代弁者性が表明されている。『Mの世代』はこの「当事者として代弁しなければならぬ」という感覚を基点としている。

同書は、本文 240 ページのうち、2/3 である 160 ページほどが中森明夫と大塚英志の対

談に割かれている。対談は前後半に分かれるが、前半は、事件が起きてから日が浅いこともあり、メディア批判から始まっている。だが、当のメディアの側の葛藤を資源として取り上げることで、大塚は、ただのメディア批判に留まらないオタク論を展開している。

大塚：ところが、それがぼくだけじゃなくて、要するにぼくの年代、中森さんとか、ぼくとか、M君ぐらいの、そういう年齢の編集者なり、新聞記者が来て、型通りの取材を終えたあとに「実はね、あの部屋は自分の部屋のように見える」とか、あるいは「どうしても、彼とぼくとどう違うか分からない」みたいなことをいう。最初の二、三日というのは、「M君狩り」みたいな取材が多くて喧嘩してたんだけど、それが過ぎたあとに、そーっと来る編集者たちというのは、どっちかというとボソボソと自分と彼との距離感について語りだして、ぼくも「実はぼくもそうなんですよ」と、答える。そうすると彼らは非常にホッとした顔をする。(中森・大塚 1989: 20)

ここでは、「自分と彼との距離感」についてとまどいが、まずは、「型通り」の取材を終えたあとのマスコミ関係者の経験として語られていることに注意する必要がある。「M君狩り」(本書の中ではしばしばある種のシンパシーとして加害者に「M君」という呼称が用いられている)とは違う水準のマスメディアの反応に、着目されている。その上で、「実はぼくもそうなんですよ」と自らの距離のとれなさも大塚自身が語ることで、彼らが「ホッとした顔をする」という発言をしている。こうして、「距離のとれない」感覚は、大塚とマスメディアを包括するような「世代的な感覚」という形でさらに拡張し

て語られる。

大塚：確かに、気がつくと中森さんやぼくやいとうせいこうさんの仕事というのはある程度、同じ方向を見てるけれども、でも、それは世代とか、時代とかとは別なもののような気がしていたんだよね。ところがM君に対し、同世代と言われたときにね、妙に納得しちゃうような感覚があって、これは何なんだろうなってね。

つまりM君のどこに、ぼくはこんなシンクロしちゃったのかなってというのが、ちょっとまだわからないんですよ。(中森・大塚 1989: 21)

こうして、「世代とか、時代とかとは別なもののような気がしていた」にも関わらず、語られてしまう世代論と、「どこに、ぼくはこんなシンクロしちゃったのかな」という形で、事件の加害者であるM君に自己同一化をしてしまう自分を提示するという実存的な語りとが並存する。この段階で、実存が把握される際に「世代」というものが掛金となっていることは、オタクというカテゴリーの拡散を考えるうえで重要である。中森がこの語を用いて以来、一般的に想定されてきた「人格類型」や「嗜好」と違い、「世代」という把握であれば、一定年齢層の者をほぼ必然的に「内在的な立場」へと包摂しうるからである。その一方で、いったん「実存としてのオタク」という主題が安定して想像できるようになれば、それを「我々のこと」として捉えうる人々の範囲を拡張する必要性は相対的に弱まる。詳しくは後述するが、実際、次項での大塚自身の議論や、同じく実存的とされる竹熊の議論においては「世代」という把握はこの時期よりは後景に退いたものとなっている。

大塚：非常に陳腐だし、みっともない姿なんだけど、ただ、やっぱり、そのお人形を抱き締めて、おろおろしてる、そういうグロテスクな少年みたいな部分を、自己像として、相当しんどいし、軽蔑されそうだけど、見据えていかないといけないという気がします。ただ、そこに居直るつもりはないですけど。そういう自己像みたいなものを彼はまるで、ぼくの前にタッタッタと走って来て、鏡を見せてくれたみたいにああいう形でやってくれたから、きつろうろたえたんだろうなという気がね、今、してますね。(中森・大塚 1989: 68)

世代論というかたちで一旦幅広く当事者性を確保してしまえば、「自己像として、相当しんどいし、軽蔑されそうだけど、見据えていかないといけない」と、M君を自分のこととして語る条件が整うことになる。だが、その一方で、大塚の語りには微妙な差異も導入されている。それを象徴するのが「真のおたく」という表現である。

きっと捨てられた子供であるM君っていうのは、マニアとか、オタクみたいなね、擬似共同体が目に見える形で存在しているからそこに行き着く術として、一生懸命、ビデオを集めてマニアのふりをしてみたんだけど、でも、あんまり入れてもらえなかったみたいなね。その意味じゃ彼は、「真のおたく」でも「真のロリコン」でもなかったんだと思う。彼のおたく文化への愛は、何かマニアックっていうよりもまさに「すがっている」という感じに近い。(中森・大塚 1989: 96)

『Mの世代』において、大塚の力点が、「内面的に／実存としてオタクを語る」ことにおかれていること、それによってM君について「当事者」として語る資格を確保されていることは、既に確認したとおりである。ただ、それがあくまで「代弁」ととどまるのは、ときによってM君と自身との間に、微妙な差異が確認されているからである。「真のおたく」なるものを想定し、「ふりをしている」「すがっている」という表現によって、M君との距離感を確認している。ここで「真のおたく」とは一体どのような存在なのかは重要ではない。むしろ、「真のおたく」からM君を距離化することの意味を考える必要がある。

その手がかりとなるのは中島梓のオタク論と、それに対する大塚の反応である。大塚が「当事者」と「代弁」とをそれぞれどのようなものとして設定しているか、またそれによって大塚自身の言論はどのように位置づけられることになるのか、より明確になる。

4-2 「ぼく」が語るべき物語ー『コミュニケーション不全症候群』をめぐる

中島梓の『コミュニケーション不全症候群』は、高度消費社会の産物として、オタクを語る枠組みを提示したという点で、ある意味では、『おたくの本』以上に、決定的な影響力を持ったと考えることができる(中島 1991)。しかし、本稿にとってより重要になるのは、この中島の議論を、大塚がいかに自己の問題として引き受け、それをどのように「当事者として代弁」するオタク語りに展開したのかである。本節では、上記の中島の書籍が文庫化された際に、大塚が寄せた解説を主たる分析対象として、「当事者」と「代弁」という距離の設定のされ方を検討していく。

まず、中島のオタク論の概要を確認しておこう。書籍の題名にもなっているコミュニケーション不全症候群を、中島は、現代の様々な社会病理に通底するものの一つとして捉えている。その最大の特徴として中島が上げるのが、「他者への想像力の欠如」である。それは高度資本主義社会への適応のための不適応であり、「過剰適応」という性質をもつものであるという。この例示として、「おタク」は、次著『タナトスの子どもたち』の主題である「JUNE 症候群(やおい)¹⁰」や、現在でいう摂食障害である「ダイエット症候群」の問題と並んで取り上げられている。

自分の見つけることのできない現実の居場所のかわりにかれらは「自分の場所」を紙袋につめて自分とともに持ち歩いている。(中略) これらの青少年たちの精神構造がいままできたようなものである限りそれはおタクである。現実におタク」という二人称を発さなくても現実のなかに居場所を見いだせなかった—その代償としてフィクション、メカニックゲームのなかに自分の場所を作りだした—その二重適応によって一見単なる変わった若者、内気で非社交的なだけのディレッタントであるように見えるだけで一応の適応者として生活している—しかしその実、内面にきわめて多くの根源的な不適応をかかえてしまっている—一色触発の精神的破綻を秘めている—というような特徴をもっている限り、それはまぎれもないおタク族の特性であるといえるのだ。(中島 [1991] 1995: 63)

ここでの論点は、二つある。一つは中島が捉えた「おタク」の特性である。もう一つは、著者である中島がおタクに対してとった距離であ

る。

中島が、「オタクの属性」を記述する上で、象徴的にとりあげるのは、「かれらが互いをおタクと呼び合う」という挿話である。この二人称で呼び合うこと自体は中森が神話として紹介しているものである。しかし、中島はそこに、目の前の相手ではなく「もの」(＝自分の場所)に定位するという特異なコミュニケーションの様式を読みとる。そこからさらに、1) 現実になじむことができず「代償」としてフィクションに自分の居場所をつくり出し、(2) 代償が提供されるために「一応の適応」をしているが内面に「根源的な不適応」を秘めていることをオタクの特性として診断を加えている。こうしたオタクの捉え方には、2年前に起きた宮崎事件の影響を見てとることができる。

次に、著者である中島とおタクとの距離についていえば、微妙な設定がなされている。『コミュニケーション不全症候群』というテキストは全体としては、当事者性を強く前提とした議論と評価できる。「オタク」とともに症例として取りあげられている「ダイエット症候群」や「JUNE 症候群」については、女性である中島自身の当事者性と連続するものとして捉えられており、そこでは自身も当事者と成りえた可能性が想定されている。しかしながら、ことオタクに限っていえば、「これらの青年」「一見単なる若者」という形で、距離を置いた記述に終始するのである。村瀬ひろみも指摘しているように(村瀬 2003: 135)、1991年の時点で「オタク、という言い方のなかには既に男の子である、という条件づけが内包されている」(中島 1991: 88)と見てとっていたからである。

「オタク」についてこのようなかたちで言及する『コミュニケーション不全症候群』に対して、大塚は同書が文庫化される時点で「母の崩

壊の後で」と題する解説を寄せる。そこでは、中島の分析を、江藤淳の『成熟と喪失』のある種の続編と位置づけ、接続を図っている。大塚は、江藤を、『他者』としての女性に関わることを早々に断念した男と、自らの〈女性〉性を産業社会に積極的に身をゆだねていくことで自死せしめている女のディスコミュニケーション」(大塚 1995: 337)を主題化した人物として評価する。そして、大塚は女を道具としてしか「見ない」吉行淳之介を規範的に批判したことを江藤の限界として再批判している¹¹。その上で、この江藤の議論を、より当事者に近い立場からさらに展開したのものとして、中島の議論を位置づけるのである¹²。

中島梓が描こうとしたのは、多分、そこから先のことだ。『コミュニケーション不全症候群』と題されたこの特異な批評は、江藤淳の『成熟と喪失』に接ぎ木されることで、その意味を始めて頭にする。江藤が〈産業化〉という概念で予見しえたのは戦後史の中の高度成長までの時代であったが、中島はその後に来る消費社会化の中で頭になった否応のない〈女性〉性の自死をめぐる本書を書き進めていく。江藤が敏感に予見した「母の崩壊」を自らの現実、自らの身体で生きてしまった女性たちをその当事者に最も近い場所から中島は解析していく。(大塚 1995: 338)

大塚は、中島の評論をその当事者性との関連から高く評価する。ただし、その評価の範囲は、彼女の「JUNE 症候群」や「ダイエット症候群」に関する分析に限られる。それらは彼女が「当事者に一番近い場所」から書ける部分であり、そのことは〈女性〉という言葉の強調からもみることができる。そして、女性性の自死とこう

した評価の意図は、その後の「男性」に対する本書の記述への評価を見れば明らかになる。

しかし、もはや「男」という他者など必要としないところであるとき彼女たちはゆっくりと自らを自己崩壊させていった。中島が描こうとしたのはそのような物語であり、そこでは〈おたく〉と化した男たちはあらかじめ捨てられている。そして、自己崩壊さえできぬまま、「人工」の身体の屈折した消費者と化し、あるいはバーチャルな〈父〉のもとに参じるしかなかった男たちについては、いつかぼくが書かなくてはならない物語のように思う、それだけは肝に銘じておきたい。(大塚 1995: 339)

ここでは、「〈おたく〉と化した男たちはあらかじめ捨てられている」という批判がなされている。しかし、中島による「オタク」の叙述を、大塚は「外在的なもの」「他者化するもの」として単純に批判するに止めない。宮崎事件の際に、「メディアの反批判で終わってはならない」と述べたのと同様に、中島が、「女性たち」についておこなった「当事者に最も近い場所から」の解析作業を、「ぼく」の問題として引き受けるのである。

今度は消費社会の中での「男たち」の問題として再び拡張された上で、あらためて当事者として引き受けられているのである。「オタク」を語る際に「当事者性」のみが強調される場合、それは局所的なものと想像されかねない。しかし同時に、この概念を「世代」や「男たち」などと言い換え可能なものとして設定することができれば、語り得る資格は際立って広範なものとなりうる。語り手を「代弁者」として位置付けたり、「真のおたく」のように差異を導入す

ることで、オタクという概念の広がりや遂行的に確認し、その分「世代」や「男たち」といった概念への重ね合わせを容易にしている。このような拡張性を折り込んだものとして定式化することで、「吉行から〈おたく〉への距離はそう遠いものではない」（大塚 1995: 336）という表現もはじめて可能になるのである。

以上検討してきたように、大塚が「ぼくが描かなければならない」問題としてオタクについて語った時、「当事者」という実存性・直接性の保証と、「代弁」という距離や間接性の主題化を同時に可能にする立ち位置が可能になった。この両者はなかなか両立しがたい立ち位置である。しかしながら、マスメディアに代表される、より外在的な語りが別に存在すると信憑されたからこそ、「当事者として代弁する」という立ち位置も想起されやすくなったのである。

だが、このような実存に結びつけつつ代弁者としてオタクに関して語るというのは、大塚にだけ限られるものではない。大塚が「世代」「男たち」等のように対象を変えつつもある程度のまとまりを持ったイメージを形成するのに対し、同じ実存を経由した代弁者としての語りでありながらも、より多様な像への結びつきがなされている竹熊健太郎の言論を次節では検討する。

5 更新される代弁とイメージの拡散—竹熊健太郎『私とハルマゲドン』

編集者の竹熊のオタク論は一見すると大塚と類似しているように見える。本稿にとって重要な点は、竹熊の議論が複数のオタク観のいずれを代弁すべきかという葛藤と結びついていく点である。

大塚を中心にこれまで検討してきたオタク論は、宮崎事件に対するリアクションに大きく規定されていたが、竹熊のオタク論はオウム事件¹³を受けて展開されたものである。しかし、参照する事件は変わっても、「当事者として代弁する」というかたちでオタクを論じるという形式としては、両者に共通する部分は少なくない。「豊かな時代においては、人は好むと好まざるときにかかわらずオタクにならざるをえない。オタクこそは豊かな時代に適応せんとする『大人』にはほかならないのに、世間が旧態依然とした『大人観』を振り回してこれを糾弾するのは、おれには根拠のない差別に見える」（竹熊 [1995] 2000: 293）とあとがきで語られるように、外在的な説明に対する違和を持っているという点も同一である。実際に、「我が内なるM君」についてわが同世代ライターがさかんに書いていた」（竹熊 [1995] 2000: 293）というように『Mの世代』を明確に意識した言及もなされている。

本書は、オウム事件という具体的な事件との距離を図りつつも、当事者性にしろ、代弁者性にしろ一つの像を結ばず、それぞれの意味内容が場面ごとに更新され続けていく点が特徴的である。結果としてオタクをめぐる多様なイメージが産出されることになる。

竹熊のオタク論が展開される『私とハルマゲドン』は、自己の個人史を振り返りながら、そこで出会った「オタク的な」人たちと自分との影響関係を説明していく。それは、「わくわく老人ランド計画」という全てが寄付で成り立つという誇大妄想的な老人ホーム設立への夢を語る祖父との思い出から始まるが、オウムとの距離が設定される上で、重要な役割を割り当てられるのは、小学校高学年から中学生時代にかけて「いじめられていた」時期に出会ったとある

人物である。

竹熊は、そのオウムを説明する場面ではじめ、「いじめられっ子の心理」という語彙を持ち出している。そして、オウム事件のようなものに陥らないための処方箋を以下のように提示している。

ハルマゲドンを待望するのも、こうした心理の延長である。おれにはそうしたいじめられっ子の心理が手にとるように理解できるのだ。まさにおれ自身がそうだったからだが、そのうえであえていいたい。自殺も他殺も考えが甘いと。これは世間がいう「君たちは甘えているんだよ」という物言いとはまったく違う。純粋に、いじめられた側の対処法として甘いと思うのだ。つまり、よく考えれば、自殺・他殺以外にも“道”はあるということである。第三の道……それをおれは“変の道”と名付けたい。(竹熊 [1995] 2000: 48)

この“変の道”を、竹熊は、まだそれと名指される以前のオタクの代表的なものとしている。そして、そこから「対処法として甘い」としてオタクとオウム真理教との差異化を図る。“変の道”を自殺・他殺以外の道であるとしたうえで、竹熊に“変の道”を教授し、「オタクとしての生き方」を体現した存在として「国鉄鉄民」という人物が紹介される。

国鉄鉄民は、竹熊の中学時代の同級生である。今であれば鉄道オタクと呼ぶのがふさわしい人物であるが、その鉄道オタクの中でもかなり特殊な志向性を持った人物として国鉄鉄民は語られている。彼の鉄道オタクとしての興味関心は、総武本線だけにあり、「この路線の複線電化に青春をかけてもいいと「おれ」に語った」(竹熊 [1995] 2000: 49) という。そうした国鉄

鉄民との思い出を媒介としながらオウム真理教との距離を語っている。

おれの現在の仕事は、中学時代の国鉄さんと鍛えた妄想が土台になっているとはっきりと言える。おれの場合は、物書きという職業を得て、子供時代の妄想をソフト・ランディングさせることができたのだが……。だからこそオウム真理教には困ってしまうものである。冗談じゃない。あれでは、まるでおれと国鉄さんの妄想がそのまま実体化したようなものではないか。

おれがオウム真理教と彼らが起した事件の報道に、戦慄する以前に奇妙な親近感めいたものを感じてしまったのは、たぶんこうした理由からだ。しかしあたりまえの結論だが、彼らの行った行為は、明らかに間違っている。それは社会の常識に照らして間違っているというだけではない。“変の道”に照らしてもやはり間違っているのである。(竹熊 [1995] 2000: 53-54)

竹熊は国鉄鉄民と「鍛えた妄想」を土台にして、現在の仕事に「ソフト・ランディングさせることができた」と言っている。そして、「ソフト・ランディングさせることができ」なかったオウムと自分との距離化を行っているのである。そして、前述したような「いじめられた側の対応」のときと同じように「救いとしての変の道」を位置づけている。ただし、前半での引用は「変の道」に至れなかったため、オウムのような事件に至ったと位置づけているのに対し、国鉄鉄民を代弁しているときには、「変の道」をソフト・ランディングできなかったからオウムのような事件に至ったと位置づけているのだ。ともあれ、こうした竹熊の国鉄鉄民の像

は、大澤（2006）等で再参照され、さらに新たなオタク像を生みだしていく。ただ、あくまでここではオウム事件に至らないための処方箋として、オタク的であることそのものは疑われていない。

竹熊は次に、「変の道」に嵌ってしまったがゆえに、日常に退屈した高校生活を送り、そこからミニコミ誌作りに嵌り、家出をするまでを語る。竹熊は、そこで出会った「大人になれよ」を口癖にするXを介して、「アングラ」な世界に嵌っていったという。

Xの向こう側には巨大なアングラの世界が広がっていて、そこはものすごく魅力的に思えた。当時のおれの感じからすれば、それは「大人でも子供でもない」世界だった。世間の尺度を超えた「あっちの世界」だ。おれはすでに「こっちの世界」に対する興味も、「こっちの世界」で生きて行く自信も失っていた。（竹熊 [1995] 2000: 72）

このように、「変の道」に嵌ったことによって、「こっちの世界」への違和を示していた竹熊が、アングラの世界という「あっちの世界」に出会ったことが語られている。しかし、竹熊はこのことをポジティブに評価づけてはいない。

オウム真理教の信者が置かれている境遇を見て、おれは苦笑せざるをえない。あれはかつてのおれ自身の姿だからだ。社会から出家して彼らは自由を得たように錯覚したのだろう。しかしいまの彼らは客観的には全然自由ではない。彼ら自身なんとなく違和感を感じているに違いないが、それは「修行が足りない」という一言で合理化される。これは、かつてXがおれに対して「大人になれよ」と

いいながらけっして大人にさせてくれなかったやり口と同じである。（竹熊 [1995] 2000: 79）

ここで竹熊は、アングラな「変の道」に嵌っているにもかかわらず、オウムに今度は距離が近づいていってしまっているのである。そして、一つの世界に嵌ることは自由ではないとして、今度は処方箋として人類学者の西江雅之の講義で聞いたという「旅人の論理」を持ち出している。そして、「この思想は、オウム真理教問題や、その奥に潜む『大人にならない子供』問題のひとつの解決策になるのではないかと、おれは考えている」（竹熊 [1995] 2000: 85）と述べている。「大人にならない子供」問題をオタクの問題の一つとして竹熊は論じているが、ここでオウムと距離化するための論理は変化している。ここでは「オタクになればオウムにならない」という論理ではなく、「オタクであるものが」オウムにはならないようにするにはどうすればいいのかという処方箋になっているのである。このように、「誰を代弁するか」によって、その都度オタク的なものが何であるのかがずれていくとともに、オタクをめぐる当事者性の持ち出し方もずれていくのである。

竹熊はさらにオウムと自己との差異が持つ意味に関して以下のように述べる。

おれはいまオウムについての文章を書いているのだが、書こうとすればするほど、それは結局自分のことになってしまう。憂鬱だよね。そりゃ、誰だって自分のダークサイドなんてみたくない。自分自身の話を、愚直に書くことにしよう。（中略）おれは、ある意味ではオウムをダシにして自分を語ろうとしている。しかし同時に自分を語ることはオウム

を語ることであり、即、時代を語ることだという確信がある。時代と自分との関係にオトシマエをつける意味でもおれはこの際徹底して自己をさらけ出してみようと思う。(竹熊 [1995] 2000: 95)

ここでは、「書こうとすればするほど、それは結局自分のことになってしまう」というように、オウムを自分から距離をとることが困難なものとして「告白」とともに議論を展開している。そして「自分のことをさらけ出して」みるのがそのままオウムを語ることに繋がると述べている。さらに、それが「時代を語ることだという確信」と結びつけられる。

竹熊が自己をさらけ出すというように本書は、個人史を振り返る構成になっており、それによりオタクというものを一貫したものであるかのように見せかけている。しかし、実際に行っているのは、様々な「オタク」と自己との距離を繰り返し図りつつ、オウムとの距離も測るという作業である。そして、その作業の中で竹熊は、「旅人の論理」「大人になりたくない子供」「変の道」という論理を持ち出すが、大澤が同書の文庫版の解説の中で正確に指摘しているように、いずれの論理もオウムのものとの差異を明瞭にするものではない(大澤 2000: 306-308)。むしろ、場面ごとにどのような集団を代弁しようとしているかによって、オタクの定義が映り代わり、オウムとの距離も変化しているのである。

ここまで竹熊の議論を追ってきたが、竹熊の言論で重要なのは、彼がオウム真理教とどこまで距離をとれているかという問題や、彼の言論が一貫しているかどうかということではない。むしろ、オウム真理教と距離を取ろうとしつつ行う彼の個人史の披露の仕方が、その都度の「オ

タク的な誰か」を媒介することなしには語られず、そしてその「オタク的な誰か」とオウムと自己との三者の距離感が測定され直していることが重要である。その都度のオタクのイメージはその代弁する側の属性によって変化していく。そして、その結果オタクをめぐる多様なオタク像が産出されつつ、それがしばしば「いじめられっ子」「インテリ」「大人になれない子供」等のイメージがしやすい具体的なカテゴリーと結び付けられ、「国鉄鉄民」やX等の具体的な人物の表象とも接続する。そして、オタクはここでは、「オウムのものとの処方箋」としても、「オウムのものとの同根性」としても語られることが可能になっているのである。これにより、読者は、オタクに対する多様なイメージを受容しつつも、非常に具体的なオタク像も同時に抱くことになるのである。

6 これまでの議論と今後の課題

本稿では、オタクをめぐる語りの中に、外在的で他者化を志向する語りが先行して存在することを与件とした上で、それに対立する自らを内在的・実存的なものとして位置づける語りが間歇的に存在してきたことに着目した。そして、その際にその実存的な語りを担保するものとして見られたのが、「当事者として代弁する」という特異な立ち位置である。

東浩紀の、あるものだけが語る権利を持つ(東 2001) という指摘にあるように、オタクに関して語る際になぜか当事者性がある種の特権性を持つことに着目して歴史を検討した。オタクという概念が様々な偶有的な条件の中で、一種独特な形で当事者性を絡めた特異な言説をどのように作り出していったのかを追ってきた。そして、その際に当事者性と本来は必ずしも結び

つくものではない代弁者性がどのように結び付けられており、それがどのような論理を可能にしているのかを見てきた。

この「代弁」という概念は、例えば「世代」等と実存を媒介させ、拡張させていくような話法を持つうえに、自己の立ち位置をオタクとしているのかどうかさえも脇に置くことができる。そして、その特異な代弁をしたときに必然的な帰結として、誰の代弁をしているのかということが問題となっていく。本稿は現代的形態としての本田透の議論からスタートし、時間を遡る形でその言論が持った特徴に関して検討している。とりわけ宮崎事件とオウム事件という特定の事件に対してシンパシーを感じ、自らの実存に寄せて言論を展開した論者として、大塚英志と竹熊健太郎の言論に焦点を当て、対象への距離の取り方と、距離をとることによってどのような言説を展開することが可能になっているかをみてきた。

本田透は、自己の恋愛をめぐる困難を感じてきたという個人史を軸に、恋愛までもが資本主義化したことに対して反旗を翻すべきだと主張する。そして、そこでは「オタク」に対する外在的なイメージとしての電車男が、恋愛資本主義による「オタク」への侵襲であると位置づけられる。それに対し、オタクを、二次元（＝フィクション）を愛する全てのもの達という形で定義づけている。ここでは、代弁者として代弁する範囲が比較的明確になされていると同時に、恋愛資本主義からの離脱という主張がなされているのである。

これに対し、大塚英志が宮崎について論じるときには、その「真のオタク」になることのできないことまで含めて語るというように、オタクに対して論じているというよりは、宮崎の中にある何かをひとまずオタクということで近似

させることで、「真のオタク」ではないが「オタク的な何か」という形で、カテゴリーの適用を拡大することをしている。つまり、宮崎に関して「同調してしまう」という所から言論を展開している。ここで大塚が「真のオタク」の代弁者だと言った瞬間にカテゴリーは世代の問題ではなく、オタクだけの問題になってしまうからである。つまり、特定の何かと名指せるものではないという感覚までも含めて代弁するという戦略がここではとられている。そして、それによって結果としてオタクを「世代」や「男性」と結びつけるような語りが可能になっているのである。

竹熊の場合には、オウム真理教が辿ったような結末に陥らないためにオウムといかに距離をとるかということが語られる。竹熊は自分がそこから距離化するために、様々な代弁をしていく中で一種矛盾したその都度の代弁を行っているように見える。それは誰かの代弁を行う瞬間に、他の誰かの代弁者としての資格を失うという危うい距離の中にオタクという言説の磁場は存在するからである。だからこそ、「自己を語っている」のに多様なオタク像が産出されるとい特殊な言論の形態をとっていたことができる。

このような語りの形式は一見、東が批判したようなオタクの閉塞的な語りの形式はなぞっているが、本稿の中で見たのは、むしろこうした話法をとることによって多様なオタク像を産出しつつ、そうであるにも拘らず具体的な表象が存立していく過程の端緒である。それは東自身がオタク自身の定義を掘り返しても生産的にならないので、「オタク的」と名指すという戦略をとらざるを得ない（東 2001: 12-13）というオタクを巡る曖昧な言説空間がどのように形成されてきたのかを辿り直す作業の一端でもあつ

たともいえる。さらに、東が同じく問題化した専門性（客観性）を持ってオタクを語る営みとは、いかなることであるかを問い返す契機ともなる。しかし、このことを論じるにはいくつか課題が存在する。

本稿の課題としてまず挙げることができるのが、大塚、竹熊の言論の性質の違いが、彼らの個人的な特性によるものであるのか、個人が起した事件と一つの集団が起した事件の違いであるのか、それとも 89 年と 95 年というオタクをめぐる言論状況の違いなのかという条件について追尾することができなかったことがあげられる。また、本田との距離も考えたときには、オタクという言葉自体のイメージがどの程度の範囲を指すものとして流通していたのかという条件もここでは併せて考えられるべきであろう。むろん、単独の原因が存在するわけではないが、その個々の腑わけ作業は行われるべき課題である。

また、オタクをめぐるある種の批評的言論がいかにより特異な形式を獲得し、その特異な形式によって何が達成されるかはある程度明らかにできたと考えられるが、この言論が実際にオタクをめぐる言論の中でどのような影響力を持ち、どのような位置を獲得したかは別稿を立てて議論がなされるべき課題である。そもそもこうした批評のあり方がいかにして要請されたのかは本論の分析の中では明らかにできなかった。そのことは彼らが外在的に「語られた」と想定するマスメディアの言論が実際にはどのようななされていたのかの具体的な追尾と、ファンカルチャー内で具体的にどのような文化様式が成立していたのか別稿（永田 2015）等と組み合わせて考察されるべき点であり、それも今後の課題となる。

注

¹「オタク」を平仮名で書くか、片仮名で書くかということが「オタク」に関して語る上で大きな負荷をもった議論である（東・大塚 2008）。しかし、議論の煩雑さを避けるために、ここでは引用部以外は全て片仮名のオタクに統一した。

²当事者と専門家である社会学者が代弁をすることの微妙な距離感に関しての議論もいくつかなされている（宮内・好井 2010）。

³「どこから電波を受信した人」という意味で、おかしな主張をする人や、社会常識に当てはまらず、コミュニケーションをとるのが困難な人のことを指す。また、そうした人々が好むとされる作品のジャンルにも用いられることがある。

⁴2ちゃんねるが発祥と銘打たれながら、発端となった書き込みが発見できないことから、創作であるという認識がこの頃にはある程度定着していた。

⁵物理的な意味での二次元ではなく、漫画やアニメ等における平面で書かれた絵のことをここでは意味する。元は物理的な二次元という言葉が語源だが、その意味は架空（フィクション）のもの全般を指すような意味で用いられることが多い。

⁶二次元と対比される形で用いられる言葉である。一般に二次元との対比で用いられるときには現実社会一般をさす意味で用いられる場合が多い。

⁷1988 年から 1989 年にかけて東京都および埼玉県で発生した、幼女を対象とした一連の連続殺害事件を指す。事件の加害者の趣味が「オタク」的な趣味と結び付けられて報道されたことでも話題となった。

⁸ここでいう M とは、事件の加害者・宮崎の頭文字 M から取ったものである。

⁹もともとは「大塚英志のフィールドワーク 10」(『新文化』1989.8.17.p.8)での発言である。

¹⁰JUNE は、女性向けの男性同性愛をテーマとした漫画小説混合雑誌である。中島梓自身も本誌の中

で連載を持ち、これがのちのやおい文化に繋がったとされる。やおいとは、男性同性愛同人誌の総称で物語に「やまもおちも意味もない」ことからとられたとされている。

¹¹ 吉行の作品における「女性の身体性に翻弄される男性像」がここでは問題とされている。

¹² ここでは深く踏み込むことはしないが、ここで

の議論は、江藤が吉行を批判した問題系自体を、中島の批評の解説という媒体で行うという非常に入り組んだ構成になっている。

¹³ 1995年の地下鉄に毒物サリンがまかれた事件を一つの頂点とし、その前後に展開していった一連の事件の総称である。オタクだけの問題に限られず、様々な知識人がこの事件へと反応していた。

文献

浅羽通明, 1991, 『天使の王国——「おたく」の倫理のために』 JICC 出版局.

東浩紀, 2001, 『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』 講談社.

東浩紀・大塚英志, 2008, 『リアルのゆくえ——おたく／オタクはどう生きるか』 講談社.

別冊宝島編集部編, 1989, 『別冊宝島 おたくの本』 JICC 出版局.

團凜児, 2013, 『「おたく」の概念分析——雑誌における『おたく』の使用の初期事例に着目して』『ソシオロゴス』(37): 45-64.

七邊信重, 2005, 『「純粋な関係性」と『自閉』——『同人界』におけるオタクの活動の分析から』『ソシオロゴス』(29): 232-48.

本田透, 2005, 『電波男』 三才ブックス.

川英友, 2012, 『自らを語り得ぬ人々』からの「当事者概念」の考察』『静岡英和学院大学紀要』(11): 85-94.

松谷創一郎, 2008, 『〈オタク問題〉の四半世紀——〈オタク〉はどのように〈問題視〉されてきたのか』 羽渕一代編 『どこか〈問題化〉される若者たち』 恒星社厚生閣, 113-140.

宮台真司, 1993, 『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・漫画・性の30年とコミュニケーションの現在』 筑摩書房.

———, 1994, 『制服少女たちの選択』 青土社.

宮内洋・好井裕明編, 2010, 『〈当事者〉をめぐる社会学——調査での出会いを通して』 北大路書房.

村瀬ひろみ, 2003, 『オタクというオーディエンス』 小林直毅・毛利嘉孝編 『テレビはどう見られてきたのか——テレビ・オーディエンスのいる風景』 せりか書房, 133-52.

永田大輔, 2015, 『コンテンツ消費における『オタク文化の独自性』の形成過程——一九八〇年代におけるビデオテープのコマ送り・編集をめぐる語りから』『ソシオロジ』59(3): 21-37.

中島梓, 1991, 『コミュニケーション不全症候群』 筑摩書房. (再録: 1995.)

———, 1998, 『タナトスの子供たち——過剰適応の生態学』 筑摩書房.

中森明夫, 1989, 『僕が『おたく』の名付け親になった事情』 別冊宝島編集部編 『別冊宝島 おたくの本』 宝島社, 89-100.

中森明夫・大塚英志, 1989, 『1989.9.4. ぼくらはメディアの子供だ』 太田出版編 『Mの世代——ぼくらとミヤザキ君』 太田出版, 14-98.

- 中西正司・上野千鶴子, 2003 『当事者主権』, 岩波書店. —
- 中野独人, 2004, 『電車男』 新潮社.
- 太田出版編, 1989, 『Mの世代——ぼくらとミヤザキ君』 太田出版.
- 大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果て』 筑摩書房.
- , 2000, 「解説 私とハルマゲドン」『私とハルマゲドン』 ちくま文庫, 305-8.
- , 2006, 「おたくという謎」『フォーラム現代社会学』 (5): 5-27.
- 大塚英志, 1995, 「解説『母の崩壊』の後で」中島梓『コミュニケーション不全症候群』 筑摩書房, 335-339.
- 竹熊健太郎, 1995, 『私とハルマゲドン——おたく宗教としてのオウム真理教』 太田出版. (再録: 2000, 『私とハルマゲドン』 筑摩書房.)

(ながた だいすけ、筑波大学人文社会科学研究所博士課程 / 日本学術振興会、dn.networks410@gmail.com)

(査読者 菊池哲彦、毛里裕一)

Otakus and their Spokesperson: Focusing on Critical Discourses in Japan,1980-1990s'

Daisuke NAGATA

This paper focused on the Otaku critique in Japan,1980-1990s',in the form of “discussing Otaku as a spokesman identified with the party”. Ordinary, concept of spokesman doesn't directly mean the closeness to a party. But, it is important what this short circuit causes.

In this paper, definition of spokesman discourse about “Otaku” has three points.(1)Forms of speech something instead of someone.(2)Justification of speech right is guaranteed by closeness to a party.(3)It is not spokesman's speech but who speaks for.

We compare Eiji Ootuka's discourse “Otaku” with Kentaro Takekuma's discourse “Otaku”.We prove what did both unique forms of discourse achieved.